雨晴れし 雲に副ひて ほととぎす 春日を指して

此ゆ鳴き渡る

作者未詳(巻十・一九五九)

この歌は、巻十に「夏雑歌」として収められている一首です。雨が上がった後、残った雲が西から東へと流れていきます。その雲に連れそうように、ほととぎすが春日(奈良市東部。春日山・御蓋山・若草山などを含めた山野一帯)に向かって鳴きながら飛んでいく場面を歌ったものです。

作者は未詳ですが、平城京内での様子を見ていたのでしょうか。『万葉集』は動植物を題材にした歌が豊富に収められています。その中でも、ほととぎすは150首以上に登場し、最も多く詠まれた鳥です。夏の渡り鳥として、日本には5月以降に多く飛来し、秋に暖かな南方へと飛び

やまと
万葉がたり

去ります。このことから、夏の到来を告げる象徴として、古代の人々に捉えられていました。本歌の漢字原文では、ほととぎすを「霍公鳥」と表記しています。難読漢字ですが、巻十七・三九一四番歌の題詞に「霍公鳥を思ふ歌」とあり、歌中に「保登等藝須」とある

「保登等藝須」とあることから、ほととぎすは春日の方を目ざしてここから鳴き渡るのだ。

ことから「ほととぎす」と読むことが分かります。鳴き声が「ホトトギ」と聞こえたことが由来と言われています。本歌の漢字原文では、ほととぎすは、『和名類聚抄』に「和名」と考えられています。保度度木須、今の郭

本歌に詠まれた時刻は不詳ですが、一般にほととぎすは早朝からよく鳴き、夜にも鳴きます。また、曇り空や雨中によく鳴くとされています。巻十・一九六三番歌など、雨中のものが見えます。本歌の季節の分類は夏です。明証はありませんが、梅雨の雨上がりを歌っているのかもしれない。 (県立万葉文化館主任 研究員・中本和)